

1950年代前半農村建築研究会の活動分析による戦後建築左派の再評価

2025/02/04 (02/11 修正)
建築史系中谷礼仁研究室
修士2年 呉雄仁

レジュメの構成

・レジュメの構成

・論文内容

【序章】

第1節 はじめに

第2節 研究背景

第3節 既往研究

第4節 研究の目的とその射程

第5節 研究対象（年代）

第6節 研究の構成と方法

【本論】

第1章 機関誌『農村建築』内容分析にみる農村建築研究会の問題意識と着眼点

第1節 はじめに

第2節 巨視的分析：機関誌『農村建築』による1950年代前半農村建築研究会の問題意識

第3節 分析結果：1950年代前半農村建築研究会の問題意識と着眼点の時期別傾向

第4節 小結

第2章 農村建築研究会による平和革命路線の継続―農林省と農村建築研究会の活動比較を通して―

第1節 はじめに

第2節 農村建築研究会と農林省の関係性

第3節 農林省による農村改革の過程

第4節 農村建築研究会委託研究にみる農村建築研究会

第5節 平和革命路線を継続した農村建築研究会

第6節 小結

第3章 農村建築研究会が到達した建築農民運動

第1節 はじめに

第2節 機関誌『農村建築』にみる農民と農村建築研究会

第3節 1954年以降に生まれた農村との向き合い方

第4節 小結

第4章 考察：農村建築研究会の先にあるもの

第1節 建築への絶対信頼：農村建築研究会の方法

第2節 三里塚闘争にみる建築農村運動の限界性

第3節 その後の建築系農村研究体の登場

【結論】

第5章 結論

・謝辞 ・参考文献／出典

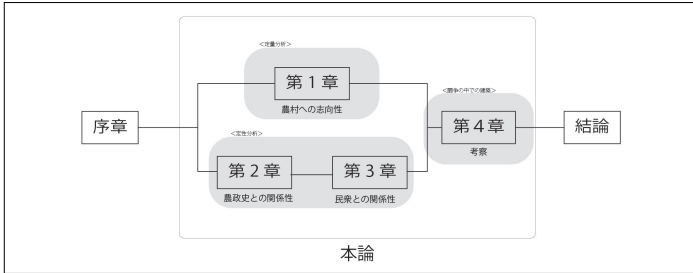


図1 本研究の論理過程

論文内容

【序章】

第2節 研究背景

・0-2-1 占領下の戦後社会と建築界・農村建築研究会

日本は敗戦後、GHQの力で急速に民主化が進み、日本国憲法において「基本的人権の尊重」が規定されるなど、**民衆の力**は無視できないものとなった。戦時下に抑圧されていた**共産主義勢力**もGHQによって解放され、積極的な活動を展開した。やがて冷戦の影響が日本に及び、日本共産党はコミンフォルム批判を受け、武力闘争に方針を転換していく。日本国民の力によって、革命を目指す彼らの意識はより一層民族に集中した。社会全体においてもGHQの占領が長引いたことなども影響し、**民族・民衆**が戦後の主題として、その占める位置を拡大していった。

建築界でも、当時の影響を受け、論壇上で「民衆論争」が展開される。特に丹下健三と西山卯三を中心とした論争がこれまでも紹介されてきた。そのうち、西山卯三が参加した団体として**農村建築研究会**があった。建築家として民主日本の建設に取り組もうとした新日本建築家集団を母体とし、日本社会のゆがみを多くひきうけ、救うべき民衆のひとつとして注目を集めていた農村を研究・実践の対象とした「建築左派」ともいえる団体であった。

・0-2-2 農地改革よりはじまる農村の変貌と農村建築研究会

戦後日本の農村は**農地改革によって変貌を遂げた**。敗戦直後の食糧危機への対策も迫られた農林省は、農村へ強力な支援を行い、1950年前後に戦前の水準まで農林水産業の生産を回復させた。また、農地改革によって、不在村地主が一掃されたことにより、農村の自治機能は高まりを見せたほか、農協というパイプによって政府と強く結びつき、農村は徐々に**保守化していく傾向**をたどった。これを手助けすることとなった農林省にも農村建築研究会の会員がいた。農林省の上からの改革に対して、下からの働きかけを行ったとみられる農村建築研究会の実態はどのようなものであるかは重要な検討事項であると考えられる。また、同時期の農村には日本共産党の武装闘争路線によって組織された**山村工作隊**が日本各地で活動していたことも重要な史的事項であった。

・0-2-4 本研究の意義

農村建築研究会を研究対象として取り上げることににより、

・民衆（農民）との関係性構築を目指した建築左派の活動実態

・“下から”の建築を通した農村社会変革への志向

といった建築／政治・思想／農村に関わる問題への一つの手がかりになることが本研究には期待される。特に現代においては、英雄として目されたモダニスト建築家の時代が終わりをむかえ、民衆に寄り添う建築家像が主流となりつつある中で、歴史の彼方に消えつつあったリアリズムを志向した建築家の活動の実態を掘り起こすことは重要である。

第3節 既往研究 ＊ここでは主要なもののみ紹介

・0-3-1-1 建築史よりみる戦後

○青井哲人（2023）「第一章 民衆・伝統・運動体―冷戦と復興、文学と建築、リアリズムとモダニズム」戦後空間研究会編『戦後空間史 都市・建築・人間』（筑摩書房）

本研究における最も示唆的で端緒となった先行研究。1950年代の建築

界の動きを文学との対比の中で建築による「民衆の主体化」を目指した当時の団体として、農村建築研究会を紹介した。ただし、「**農研のプロや学生たちは、民衆との乖離に苦しんだのか、あるいは独自の魅力的な成果を出していたのか。その実際を知りたい。**」（[3] P52）と述べるにとどまり、農村建築研究会の実態に迫ることはできていないが、建築史と政治・思想史の文脈から1950年代をとらえることを目指した本研究の基礎となる研究といえる。

・0-3-1-2 農村建築研究史の中での農村建築研究会

○山崎寿一「創生期の農村建築研究会 活動の軌跡～農村計画委員会前史～」『農村建築研究会大系化レポート』、1998）

農村建築研究会創生期（1949～1967）の活動について取り上げ、**会員数の増加や調査のリスト化、雑誌『農村建築』の記述をとりあげる**ことによって、建築学会計画委員会発足までの研究と組織発展の歴史を区分し、農村建築研究会の4段階の変遷を定義している。一方で、**1950年代の出版物や研究内容、社会状況との関連性を十分に吟味できていない点**が欠点であると山崎自ら指摘している。

○西吉永一（2012）「調査資料抽出にみる集落街並み研究の史的展開―その建築史学的特質」（早稲田大学中谷礼仁研究室2012年度修士論文）戦後を中心に建築史学における集落研究が確立されるまでの過程を調査・評価の方法から分析し、これまでの調査方法論と評価指標を、保存を前提としない集落研究の方法論としての再解釈を試みている。農村建築研究会は、黎明期の団体として紹介している。また、微視的分析として白川村調査（1951）を黎明期に行われたものとして、千葉調査（1949）を総合理念派の調査としてそれぞれ紹介している。

・0-3-2 既往研究の総括

上記の主要な既往研究及び研究背景から、農村建築研究会は、農村史、政治・思想史、建築史の3つの領域の重なり合いの中で位置づけることができる。しかし、農村史と政治・思想史、政治・思想史と建築史の重なり合いにおいては十分に実証的な研究は行われていない。本研究には、これら3つの項目の重なり合いを個々に検証し、総合することで農村建築研究会の初期の活動をとらえることを目指す。

第4節 研究目的とその射程

1950年代前半における農村建築研究会が**民衆（特に農民）や社会（特に農林省などの農政）とどのような関係を築き、どのように活動したのか**を冷戦期の政治思想の文脈の中で明らかにする。

第5節 研究対象（年代）

農村建築研究会の活動には、研究体として活動が活発化した時期もあれば、個人の活動に終始するなどして停滞した時期もある。本論では、農村建築研究会の機関誌『農村建築』（旧『農建月報』）の各号の「農村建築研究会ニュース」の確認を通して、研究会の主要な活動である共同研究・共同調査が途切れた**1955年**にその区切りを見出し、本研究の対象時期として定義した。

第6節 研究の構成と方法

・第1章

農村建築研究会を農村建築研究の文脈でとらえ、彼らの研究活動の**志向性及び理念**を再検証する。定量的な資料として機関誌『農村建築』の各記事の言及内容を検討し、彼らの着眼点・問題意識を各記事より抽出し、その**問題意識の巨視的な流れや傾向**をつかむ。

第2章

研究背景で述べたように、農村建築研究会に農林省の職員がいたこと、そして、農林省からの研究委託の調査も少なからずあった。その事実から“上から”の農林省による農村の改革の志向性を再確認し、

入手することのできた農林省からの研究委託の調査報告書の内容を確認し、**農村建築研究会が農林省とどのような距離をもって、活動を展開していたか**を確認する。

第3章

第1章で見出した農村建築研究会の「農民の意識」「農民への啓蒙」「農民との協働」という問題意識の詳細を確認し、**彼らの農民との関わり方がどのように変遷し、最終的にはどのような関係性を築こうとしたのかを明らかにする。**

＜ここまでで一旦の結論として農村建築研究会の全体像をまとめる＞

第4章 考察

明らかにされた農村建築研究会の活動を彼らが確立したその後の事例との比較等を通して、その独自性や限界性に言及しながら彼らの活動を現代へ接続していく。

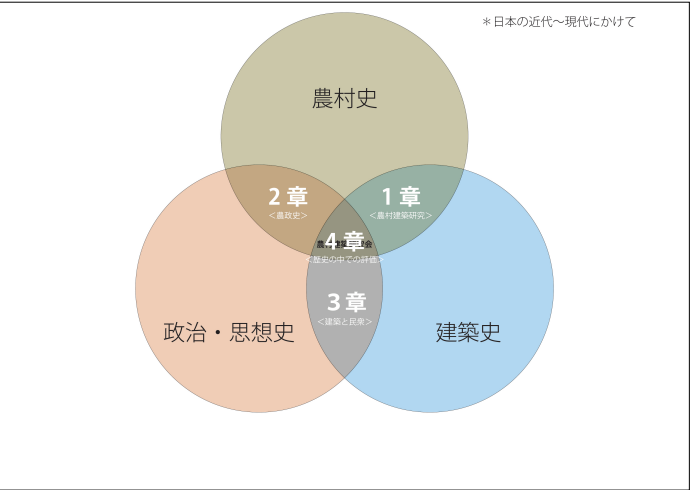


図2 本研究の分野構成と章ごとの位置づけ

【本論】

第1章 機関誌『農村建築』にみる農村建築研究会の問題意識と着眼点

第2節 巨視的分析：機関誌『農村建築』による1950年代前半農村建築研究会の問題意識

・1-2-2 分析方法

定量的な分析として、機関誌『農村建築』（旧農建月報）30号（1951～1955）を使った分析を行った。その枠組みは以下の通りである。
①内容を読み下し、主に研究調査報告に記載されている内容から各筆者の問題意識を抽出する。
②各号ごとに問題意識を表の中にプロットし、簡単な変遷を示す。
③各号ごとに重複する項目の数も考慮に入れながら、各年半期ごとに各項目の登場頻度を集計し、各時期において、それぞれの項目がどのくらいの割合を示しているか色の強弱で表に示した。（表1、最大25%で5段階で示した。）

第3節 分析結果：1950年代前半農村建築研究会の問題意識の時期別傾向

表1で示されるように、比較的全域にその興味は散らばっているものの、特に農民の意識および、農村生活に対する問題意識が全体を通して高いことが再確認されたほか、**徐々に技術者の意識の高まりが見えることや初期には生活および産業の共同化への意識がみられることなどを明らかにした。**

[illegible]